五中だより

令和８年３月２日
小平市立小平第五中学校
校長　伊藤克行
小平市小川町１－７９８

新聞記事「学校をひらく」から

校長　伊藤　克行

朝日新聞で１月１４日から２月１８日の間に４回にわたって掲載され、教員免許を持つ弁護士 真下麻里子さんが書いた「学校をひらく」という特集が大変興味深かったので紹介します。

第１回は以下の事例から話が始まります。

> 生徒Ａが「陰口や仲間はずれがつらい」と訴え、担任らが確認し、おおむね事実と判断。保護者に連絡すると、生徒Ａの保護者Ｂは「Ａが安心できる環境を整えてほしい」と訴える。保護者Ｃは「子どものケンカなのに、我が子（Ｄ）を悪者扱いするのはおかしい」と謝罪や指導を拒む。
>
> 生徒Ｄ本人は「謝りたいが、親（ＣとＦ）に止められている」と担任に打ち明ける。そのうち生徒Ａが登校をしぶり始め、保護者らの不安が増し、保護者Ｅが「なぜＤらを厳しく罰しないのか」と学校に迫る。生徒Ｄのもう一方の保護者Ｆは「これ以上Ｄを加害者呼ばわりするなら弁護士を立てる」と来校する。　（学校をひらく）子に支援・指導 時間が足りない。朝日新聞。2026.1.14, 朝刊, P.21

１件の相談に異なる当事者からの要望が６件集まっています。複数の要望や個々の気持ちを踏まえながら、それぞれの生徒にとって何が最善な支援かを協議していきます。

４月の学校だよりにも書きましたが私は小平第五中学校が生徒たちにとって「安心して失敗できる場所」でありたいと考えています。学校は、単に勉強をするだけの場所ではありません。間違ったことをしてしまったときに、どう向き合い、どうリカバーするかを練習する場所です。

「ごめんなさい」が言えたとき、心は少し軽くなること。

「次はこうしよう」と考えることで、自分を好きになれること。

こうした経験こそが、子どもたちの「自分を大切にする力（自己尊重)」を育てます。それぞれの保護者が「わが子を守りたい」という気持ちは、よく理解できます。しかし、大人が「守ろう」と必死になるあまり、子どもが自ら間違いを認め、成長しようとする「一番大切な機会」を止めてしまっているとしたら、それは本当の意味で子どもを守っていることになるのでしょうか。

真下さんは記事の中で、教員の専門性とは「喧嘩をゼロにすること」ではなく、「トラブルが起きたとき、子どもが自分自身で考え、解決していけるように伴走すること」だと述べています。私たち教職員は、失敗してしまった生徒が、その失敗を乗り越えて「ひと回り大きくなる瞬間」を一緒に作りたいと願っています。

もし、お子様が何かトラブルに関わってしまったときは、まずは落ち着いてお子様の「生の声」に耳を傾けてみてください。そして、私たち学校を「共に解決を目指すパートナー」として頼っていただければ幸いです。そんなことをこの連載記事を読みながら考えていました。

生徒たちが「失敗しても、ここなら大丈夫」と安心して学べる環境を、保護者の皆様と一緒に作っていけることを願っております。令和７年度の１年間のご協力に心より感謝いたします。

学習発表会

２月２８日（土）は学習発表会でした。多くの皆様のご来場、ありがとうございました。

午前は体育館にて各学年からの発表、そして生徒会企画の３年生を送る会を行いました。午後は各教室の作品展示を公開しました。１年間の学習の成果を発表し合い、学びを深めるよい会になりました。

展示見学

学習発表会

生徒会企画

１年間ありがとうございました

保護者の皆様、地域の皆様、令和７年度も本校の教育活動にご理解とご協力をいただきありがとうございました。子どもの成長のため、そして皆様のご期待に応えるべく、教職員一同取り組んでまいりました。至らぬ点もあったかと存じますが皆様との信頼関係をさらに深めていけるよう、引き続き努力をしてまいりますので、今後も変わらぬご支援をいただけますと幸いです。